



イソギク

132 編は **都に上る歌**。ですが、都エルサレムとダビデとの関連を想起させる賛歌となっています。

エルサレムはカナン侵入の時にヨシュアに征服され、滅亡したアモリ人の王の都でしたが、ユダ族の嗣業の地となりました。(ヨシュア記 15:8) その後も、エブス人が住み着いていました。サウル王の家臣として戦ったダビデは **ペリシテ人(ゴリアト)の首を取ってエルサレムに持ち帰り、その武具は自分の天幕に置いた(サム上 17:54)** と記されています。ダビデの王への道の最初の礎がエルサレムです。

サウル王家滅亡後、ヘブロン王であったダビデを全長老たちはイスラエルとユダの二代目の王としました。ダビデは、エブス人が難攻不落と豪語していたエルサレムのシオンの要害を陥れ、エルサレムを自分の町としました。

1 連は **主よ、御心に留めてください／ダビデがいかに謙虚にふるまったかを。(1)** と、ダビデの謙遜を褒め称えています。ダビデは **主に誓い／ヤコブの勇者である神に願いをかけました。(2)** とあり、その内容は「わたしは決してわたしの家に、天幕に入らず／…神のいますところを定めるまでは。」(5) とありますが、そのような願掛けの記事は聖書には記されていません。ただ、サウル王の敵愾心から逃れ、サウル王の存命中は荒れ野、要害、洞穴、砂漠、洞窟に潜み、あるいは他民族の地に寄留し、ダビデは逃避行の連続でした。やっとダビデはエルサレムに安住の地を得ました。

2 連、3 連には **見よ、わたしたちは聞いた／それがエフラタにとどまっていると。ヤアルの野でわたしたちはそれを見いだした。(6)** との不思議な言葉がありますが、**それ** とは、「神の箱」を指しています。ダビデは王となって、エルサレムに城壁を築いた後に、「神の箱」の安置に取り組みました。預言者サムエルが幼い頃に「神の箱」はペリシテ人に奪われ、引き回され、忌み嫌われて、牛に曳かせた無人の車に乗せてユダの地に返され、キルヤト・エアリムに置かれたままになっていました。それをダビデはエルサレムまで運び上げました。精鋭三万を集め、すべての兵士を伴い、その作業を行いました。エルサレムは神にも「神の箱」にも **憩いの地** となりました。**ダビデとイスラエルの家は皆、神の御前で糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンパルを奏でた(サム下 6:5)** と喜びにあふれています。

4 連、5 連では **ダビデはあなたの僕／あなたが油注がれたこの人を／決してお見捨てになりませんように。(10)** と、神が選び、立てた王ダビデと、神が共に住まわれる都シオンに対する、神の祝福の約束を願い、歌っています。王権の継承、民の豊かな食糧、祭司らには救いを求めています。

134 編は **都に上る歌**。の最終編ですが、**主の僕らよ、…夜ごと、主の家にとどまる人々よ(1)** と、付け加えられたかのように、神殿で働く人々へ言及し、祝福を祈っています。

『讚美歌 21』には関連讚美歌はありません。ジュネーブ詩編歌は以下の通りです。

132 編 https://www.youtube.com/watch?v=jl_H-AP0irA&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=132

134 編 <https://www.youtube.com/watch?v=qgMLHdUrMHQ&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=134> (後半は『讚美歌 21』24)